

3.11 東日本大震災の経験---震災後の対応と被災状況

東北大学大学院医学系研究科附属動物実験施設

笠井憲雪

3.11 東日本大震災は 1000 年に 1 回という未曾有の震災であった。震度 6 強の揺れに、震央に近い東北大学は人命も含め大きな被害を受けた。建物や設備等の被害総額は 800 億円とも言われている。全学にある約 70 カ所の実験動物の飼養保管施設も動物の死亡を含め、その被害は甚大であった。しかし、事前に地震対策が取られていた施設は、直接の被害としては比較的軽微であったが、問題は震災による電気や水道、ガス等のインフラの停止であった。当施設の 2 カ所（中央棟 5200 m²と臨床分室 1000 m²）の飼育施設の被害と対応について、報告する。

3 月 11 日午後 2 時 46 分震災直後の揺れが収まった後、施設職員は他職員及び施設で実験中の研究者学生へ、早急に建物外へ脱出するよう各階の飼育室実験室へ呼びかけ、その後安否確認を行なった。幸い負傷者等はいなかった。

動物の被害は、翌日、自動給水装置の不具合からマウス約 80 匹ほどの死亡が確認された。マウスやラットの飼育装置の転倒は臨時に使用していた簡易飼育棚 2 台のみであり、他の約 240 台は室内での移動はあったが転倒しなかった。これは最近 10 年以上にわたる飼育装置の耐震補強の結果であろう。大震災も「備えあれば憂いなし」と実感した。転倒した 2 台の飼育棚のケージから動物は飛び出したが、全て室内で捕獲できた。イヌやブタ等の飼育装置及び動物の被害なかった。

震災直後に停止したインフラのうち、電気と水道は翌日午前に復旧したが、津波被害によりガスの復旧には 2 か月を要すると報道された。当施設は隣接する大学病院とともにパワーセンターからガスにより作られた蒸気の配給をうけ、暖房とオートクレーブに使用しているため、暖房はもとより器材等の滅菌ができなくなった。そこで SPF を守るために飼育室のケージ交換は停止し、入室を制限し、震災前の状態を保つとした。しかし 3 月 17 日にはガス停止の長期化を見越して動物の 3 割削減を研究者に要請し、実施した。しかし、25 日にはガスも復旧し 28 日は施設の全面復旧宣言にこぎ着けた。2 ヶ月のガス停止予想が 2 週間で復旧した訳で、災害時の状況の見通しの難しさを知った。

市民生活用の電気水ガスは長期に停止し、食料、ガソリン等の入手が困難になったため、業務の遂行には施設職員 35 名の生活維持にも配慮する必要があった。震災数日後から各地からの食料等の支援物資が集まりだし、これらを用いて施設職員への昼食及び一部朝夕食の炊き出しを 3 月 28 日まで行なった。他に実験動物関係機関や企業等から滅菌床敷き等、多くのご援助をいただき、大変ありがたく感じた。この場をお借りして感謝申し上げたい。